



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1983 精道教育促進協会 (芦屋)三三・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

新しい生命へ 人はキリストを通して生まれかわる

聖土曜日徹夜ミサで

1 日が暮れたばかりの今日の焦点はキリストの墓です。聖土曜日、つまり復活祭の前夜のできごとでした。聖金曜日の焦点はキリストの十字架でしたが、聖土曜日にはキリストの墓が焦点になります。

マグダラのマリアとヤコボの母マリアとサロメ、この三婦人が墓を見たときのことでした。翌日の明け方、「安息日が終った」ときで、まだ陽の昇らぬころイエズスを葬った所へやってきました。三人の婦人の心配は次のことばにあらわれています。「墓の入り口から、誰がああ石をころばしてくれましょうか。」(マルコ6・13) イエズスを葬った墓で、婦人たちはなるべく早くイエズスの御体に香料をぬり、死の腐敗を防ぎたかったのです。

「空っぽの墓」

婦人たちは石が傍らに転ばされているのを見、墓の中に入ります……。キリストの十字架とその死と葬りの証人となったすべての人

びとの、さらに入り口を石でとぎした墓を見

たすべての人々の知恵と心に、安息日が明けけるやいなや、根本的な変化が訪れます。(…)

空の墓を見たとき、マグダラのマリアとヤコボの母マリアとサロメは仰天します。「恐れおののいた」のです。三人は、「白い衣を着て」墓の中にいた青年からちゃんと話を聞いていたのに、怖くなって震えたのでした。いえ、話を聞いていたから、よけいに驚いたのでしょう。「イエズスはもうよみがえって、ここにはおいでにならない……。主はあなたたちに先立ってガリラヤにおいでになる」と言っていました。けれども、婦人たちはこの話を人に伝えることなどできませんでした。「おそれていたので、彼女たちは一言も人には話さなかった」のです。

以上が復活前夜祭の典礼文にあらわれる最初の場面です。

空っぽの墓から類推すること

2 二つ目の場面は聖パウロが記しています。安息日の翌朝、キリストの弟子たちには、こ

の空っぽの墓という新事実の意味が少しずつわかってきました。弟子たちはそのことをはっきりと口に出すようになりました。主がなさったこととお教えになったこと、これらすべては復活という事実のなかで成就した。弟子たちにはこれが明らかになったのです。

使徒聖パウロは五十七年頃、つまり復活後二十五年くらい経ってから、ローマ人への手紙の中で記しています。「キリスト・イエズスにおいて洗礼をうけた私たちは、みなキリストの死において洗礼を受けたことを、あなたたちは知らないのか。それゆえ私たちはその死における洗礼によってイエズスと共に葬られた。それは、御父の光栄によってキリストが死者の中からよみがえったように、私たちもまた新しい生命に歩むためである。」(ローマ6・3・4)

初代の使徒たちにとって、また私たちにとっても、復活祭前夜を中心にいるのは、キリストと共に死に、キリストと共に葬られるべき罪の人、つまり「古い人」です。この「古い人」は、ちょうど、キリストの贖いの死によって罪が死ぬように、復活の日曜日の夜明けに「新しい人」へと生まれかわらねばならないのです。つまり、人間はキリストを通して新しい生命へと生まれかわるのです。

以上が「空っぽの墓」に関する使徒の類推です。「空っぽの墓」はキリストの復活を表わすだけでなく、新しい生命、恩恵の生命、そして「新しい人」を表わしているのです。

まず第一に、聖金曜日の中心は十字架でした。「私たちの古い人間がキリストと共に十字架につけられたのは……もはや罪の配下につかないためである。なぜなら、死んだものは罪から免れたからである」と聖パウロは書いています。

続いて、聖土曜日の中心は墓です。「私たちがキリストの死にあやかって彼と一体になると聖パウロは言っています。聖土曜日は

復活の日曜日の前夜です。日曜日の夜明けに、婦人たちは墓が空っぽなのを知りました。死者からよみがえられたキリストはもう死ぬことがない。彼に対して、もはや死は何の力ももっていない。使徒のこのことばは、信仰と希望の叫びと言えるでしょう。みなさん方も同じように、「自分は罪に死んだもの、キリスト・イエズスにおいて神のために生きるもの」である、と思わなければなりません。

新たな生命

3 安息日の翌朝、空っぽの墓をみておのき、口もきけなかった婦人たちが受け入れましょう。ローマ人への手紙で語りかける使徒の叫びを受け入れましょう。とくに、徹夜祭中に洗礼の秘跡をうけ、新しい生命をいただいた皆さんがこれを受け入れてください。ように。この生命をうけた私たち全員、そして、ゆるしの秘跡(告解)にあずかり生命を回復した人々がかかることで、これを受け入れましょう。私たち一人ひとりの中で、キリストは、新しい建物の「隅の親石」となってくさいました。(…)

復活前夜祭には、過越しの秘義の成就が告げられます。聖金曜日の中心には十字架、聖土曜日の中心にはキリストの墓、そして、復活前夜の朝まだきに、主の右手の御力が啓示されます。空っぽの墓はキリストの復活の証拠となり、私たちはキリストと一体となります。「(キリストの)復活にあやかる」(ローマ6・5)からです。

新しく洗礼を受けた愛するみなさん、ご聖体を分かち合う兄弟姉妹の皆さん、詩篇の作者が「いや、私は死なない。生きて、主のみわざを語ろう」(詩篇118・17)と信仰告白したように、私たちも、改めて信仰を確かめましょう。アーメン。(一九八二年聖土曜日)

キリストに従って 人生の価値を知る

(世界中の五百以上の大学で、四百のグループが「勉学の質・生活の質」のテーマのもと、入念な分析を行なってきました。)

(…)みなさん方の作業の成果である提案、質問、積極的な指摘事項を、イエズス・キリストの教えに突き合わせるようお勧めします。そうすれば、人間がほんとうに必要なとしているものの中味と値打ちを示してください。キリストをおいてほかにないこと、また、キリストの光がなければ、人生を理解すると言っても深さも現実味も具体性もない理解の仕方になってしまうことがおわかりになるでしょう。

より充実した、より真実な生活

より一層充実した、より一層誠実な生活をしたという望みは、人間が幼い頃から抱いているものであり、文学や芸術の中で色々な声となり形となって現われています。しかし、若い人たちの間でさえもこの望みは往々にして損われ、反抗やむこうみずの暴力といった墮落した形にあらわれたり、愚かな野望になり果てたりしてしまいがちです。

時が経つにつれて、なげやりなあきらめの態度、中味のない楽天主義に負けてしまう傾向にあります。性格の強い人や社会的・経済的に恵まれた人の場合には、反社会的、反文化的な態度にあらわれてくるようです。そうになると、誰もが職業上の成功とか学問に対する単なる情熱、政治抗争とかいったありふれた慰めで気を紛らわし、現実から逃避しようとするのです。

豊かな生命を与えるために

人はしばしば何気なく人生を過ごしてしましますが、創造主の御働きは人間の心の中で絶えまなく続いています。ですから、無限の真理、無限の美、無限の正義、つまり神の秘義、神の御子の秘義への道は閉ざされたわけではありません。このような人々のもとへ、「神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神」であらせられる御子が、「われら人類のため、またわれらの救いのために」来てくださるのです。

人はみな、「生活の質」の「知られざる愛好者」(G・レオバルディ)ですが、その「生きる」とは何かが明らかになされ、身近なものとして目の前にあらわれます。もはや不確かな終点に向かってあてどなくさまよう旅人の境遇ではなく、(愛する御方に)出会い、従う可能性を無償で与えられたというわけです。実に、「この命はあらわれた、私たちはそれを見て、それを承認し、御父のみもとにあつて、いま私たちにあらわれた永遠の命をあなたたちに告げる」(ヨハネ1・2)と書かれているとおりです。

イエズス・キリストの「生活の本質」は、人間の望みとあがれを完全に満たす唯一のものであり、それは「みちみちるほど」私たちに与えられるのです。「私は羊たちに生命を、ゆたかな生命をあたえるために来た。」(ヨハネ10・10)

イエズス・キリストとの出会いにおいて本當の命の種がおしみなくまかれまします。「私について来なさい」と、イエズスはすべての人をお招きになりました。このキリストの呼びかけには、生命の種が「だれも気づかないうちに」(マルコ4・27)簡単に、すぐさま生えて育ち、「多くの実をつける」(ヨハネ15・8)可能性が含まれているのです。

以前フランスの若者たちに話したことを思い出してください。「私について来なさい」という言葉からわかるように、キリスト教とは、多種多様な教えの集合ではなく、生けるイエズス・キリストとの関わりを要求するものです。(一九八二・四・一〇「教皇様の声」第24号参照)

恩寵の働きによって人はイエズス・キリストを発見し、そのまことの人格と言葉にひかれてキリストに従うようになります。そうしてはじめて自分を見出し、自己の生命の価値、知性と自由の尊厳を認めておどろくのです。謙遜で忠実な態度でキリストに従うならば、その驚きは深くなり、生命の尊さとぬちを理解することができ、より一層人間らしくなっていくきます。

この驚くべき無償のたまもの、つまり、より一層「人間らしい」「生活の質」を体験していくなかで、私たちはそれぞれ、キリストの使徒たちへのお約束実現を知るのです。「私にしたがう人は永遠の生命をうけつき、この世では百倍のものをうけるであろう。」(マテオ19・29参照)「私にしたがう人はやみの中を歩かず、生命の光をもつであろう。」(ヨハネ8・12)

生命の体験

初代の弟子たちの場合と同じように、今日私たちにも、より一層真実で自由な人間らしい「生活の質」に出会い、それに従い、経験する機会が与えられています。

キリストの神秘体である教会は、現代におけるキリストの現存をあらわしています。同時に、神の御子と御父と聖霊との「親密な交わり」の「しるしであり、効果的な道具」(「教会憲章」1参照)でもあります。教会の生命、つまりその活動、信仰の秘跡、祈り、諸聖人の通功、生ける聖伝に対して、よく自覚したうえ自由な態度でかわりあうなら、イエズス・キリストを手にとるようにはっきりと知ることができ、キリストに従い、なかならずその秘義に分け入るようになるでしょう。教会生活においてこそ、イエズス・キリストとの最初の出会いの時感じたあの不思議な驚きが、実に摂理的であったことがわかるのです。そこで私たちは一人ひとり確信しつつ繰り返します。「あなただけが永遠の生命の言葉をもっておられます」と。(ヨハネ14・6参照)

教会に、その生命に、そして教導職に属していると言っても、ただ形式だけにどまり自分のことばかり執着しているうちは、完全なキリスト者としての完成された人格を備えることなどできません。私たちは「味を失って、もう何の役にもたない塩」(マテオ5・13)になったり、「失うのをおそれタレントを地下にかくす」(マテオ25・25参照)というような悲しむべき状態とは縁を切らねばならないのです。

理解を求める信仰

イエズス・キリストに出会い、キリストにつき従えば、ほんとうの生命の種を手に入れることができます。しかし、その種が成長し熟すには、私たち一人ひとりが生活上の問題や状況をすべてキリストとの出会いと道行という光に照らして考え、目の前に、そして心の中に信仰への驚きと確信を保っていかなければならないのです。信仰が人間生活を照らし、清め、あらゆる

説教・講話・書簡等の抄訳

面とかかわりをもたなければ、また、勉学や仕事、家族生活、社会生活の義務と信仰との間にある「分離」がその隔たりを小さくしないなら、信仰は抽象的でつかみどころのない感情と化し、理性的でも自由でもない一連の義務といったものになり下がってしまいます。

ローマ教区司祭の会合において、私は教会と大学との密接な結びつきについてふれ、次のように述べました。「教会が宣言する信仰とは、知を求めるもの、つまり人間による理解をめざし、人間の知性によって思いめぐらされねばならないものです。知性本来のもつ自然の光によって知り得るものの中に、信仰を並べ合わせてみるのではなく、こうした知識を内側から求めてゆくのです。従って、前任者パウロ六世が使徒的勧告『エバンジェリイ・ヌンツィアンディ』で主張したとおり、信仰は文化とならねばならないということをさまざまな機会を通してお話ししてきました。」

同僚や先生の前でより一層人間らしい「生活の質」の証人として毎日はげんでいるみなさんを、主がささえ慰めてくださいますように。現実をいささかも否定したり忘れたりせず、幸福になれるはずですから、皮肉屋になつたり失望したりせずに、現実すべてに理解を示し心を開いてください。こうしてみなさんは、あなたのうちにある希望の理由をたずねる人に、常に答える(ペトロ①③・15)ことのできる人になるのです。

神の御母であり、私たちの母、生ける希望の源(ダンテ・アリゲリ『パラディソ』33・10)なる聖マリアに、みなさん方一人ひとりを、現代世界におけるキリストの証人として

のあなたがた一人ひとりを委ねます。これらの願いが心からの特別な使徒的祝福を確認できるのをうれしく思います。この祝福をみなさん方の親族、友人、そして大切なすべての人々にもお送りします。

(一九八一・四・六)

マリアをまねて キリストとの親しさを!

預言者エリアのエピソードを読むと、自然に次の考えが浮かんできました。エリアは、使命を果たすに当たって、障害と危険、困難にうちあたり、精神的に疲れ果ててしまいました。そして、砂漠に逃れ、エニシダの根元にすわり込んでしまふのです。死をのぞんだエリアは苦しみあまり、「主よ、もうこれで結構です。私のいのちを取り去ってください」と言い、眠ってしまいました。するとどうでしょう。天使があらわれて、預言者を起こし、奇跡のパンと水とを示して言いました。「さあ、食べなさい。あなたのゆくべき道はまだ遠いだから。」(列王①9・4、8参照)

若者たちよ、あなたたちも、艱難辛苦や敗北を味わい、助け手や模範を得ることができず苦しみ、孤独に悩まされて信頼を失い、がっかりし、行く先の不安を憂えてつらくなることがあるでしょう。そんなときは次のことを思いだしてください。神は創造と救いの摂理によって、私たちのすぐ傍らに聖母マリアがいるようにしてくださった、ということ。預言者を助けた天使のように、聖母はかたわらで、私たちを助け励まし、「自身の霊性で、人生という旅を続けるために必要な光と力はどこにあるかを教えてください。」(…)

キリストとマリア的一致

典礼の朗読からマリアの霊性の特徴をみると、二つ目の考えが浮かんできます。マリアの霊性とは、徹頭徹尾「神のみことば」に一致することにあると言えます。

大天使ガブリエルは、マリアが神に選ばれたものであること、そして救い主イエズス

の母となるよう召されていられることを告げます。そのお召しをマリアは決然と受け入れるのです。「私は主のはしためです。みことばのとおりになりますように。」

(ルカ1・38)キリスト信者としての信仰も、このように決然とした徹底的なものでなければなりません。聖ヨハネ福音書のことばはまことに急所をついています。「私を遣わされた父が呼びたまわぬかぎり、だれ一人私のところには来られない。(…)父から聞いて教えを受けた人はみな私のほうに来る。」(ヨハネ6・44、45) わかりますか。イエズス・キリストを知り、キリストに従い、キリストを愛するとは、御父からの特別な「呼びかけ」を受けることなのです。なによりも悲しいのは、この呼びかけに応えず、拒んでしまうことです。一番までも、しかも自己を高めうる態度と言え、この呼びかけを喜びと感謝の心で受け入れることにほかなりません。ちょうど、いと聖なるマリアと同じように完全に、すべてにおいて、呼びかけに応じた生き方をすることです。つねに信仰に篤く、信仰の中味をよく知った信者でなければなりません。困難を乗り越えてゆきなさい。そうすれば、信仰の価値はさらに高められます。そしていつも、しっかりとした確かな信仰の証をしなればならないのです。

マリアの霊性は、イエズス・キリストとのこの上ない親しきにあると言えます。母親のみがもちうる根本的な親しき、すばらしい仕方御子にいのちを与えた事実からくる親しさ、効果的な親しさのことです。なぜなら、お告げを受諾した瞬間からカルワリオにいたるまで、また、主のご復活からマリア自身の被昇天のときまで、マリアにとってイエズスは、最高絶対的愛でしたから。その親しさはまた、使徒職における一致でもありました。

キリストのあがないのみ業にあれば近くから参与され、なお今でも、全人類のために主に取り次いでくださっているからです。みなさんもマリアのように、キリストと一致して生きてゆけますように。あの唯一すぐれた手段、ご聖体の秘跡において独特なかたちで実現する、神との一致・親しさを、自分のものにしてください。「命のパンは私である。(…)天からくだった生きるパンは私である。」イエズスご自身が、ご聖体を通して、私たちとの神秘的で崇高な一致をお望みになったのです。このご聖体による一致と親しさこそ、永遠の生命を得るための第一の手段です。キリストは永遠の生命を約束してくださいました。「このパンを食べる者は永遠に生きる。私の与えるパンは、世の命のために渡される私の肉である。」(これは天からくだるパンである。これを食べる者は死なぬ。)(ヨハネ6・50、51) マリアの模範にならない、キリストとの一致を保たれますように。一日、一週間の理想がご聖体拝領でありますように!

最後に、マリアの霊性について、もうひとつのことを考えてみましょう。それは、マリアの献身です。マリアはご自身を、余すところなく神とイエズスに与え尽くされました。同じく、使徒や弟子たち、助けを必要としている人々、そして誕生を間近にひかえた教会のため、完全にご自身を捧げたのです。マリアは、教会の初めのころからずっと力強いが目立たぬ仕方で助けてくださっています。みなさんがこれを見習うことのできますように。愛徳のために、自分を捧げ尽くすのです。不幸にも憎みあっている人々がいるなら、そこに愛をもたらしってください。聖パウロもエフェソ人への手紙で語っています。「互いに情けとあわれみをもち、(…)互いにゆるし合え。(…)キリストの模範に従って、愛のうちに歩め」(エフェソ4・32、5・2)と。

(一九八二・八・八)

不変の教え

精神面の優位

歴史的観点から現在をかえりみると、最も深刻な問題の一つは、人間の命を左右する根本的な価値に対して尊敬の念が薄れてきているということだ。私の最初の回勅で述べた通り、人間の現状は、道徳的に要求されること、すなわち正義と愛の要求する状態から、はるかに隔たっていると恐れられます。(『人類の救い主』16参照)

人間は、神がご自身のためにお望みになった唯一の被造物であり、『現代世界憲章』(24)それゆえあらゆる価値の基であります。人間は神のかたどりであり、神に似た者として創造されました。種々の価値基準は、その人間に関係づけたときにだけ意味をもつのです。人間はもとより、神の無限の神秘に対して開かれた存在であることを認めることによってしか、ほんものの価値基準を確立することはできません。この価値体系があれば、人間を物事や制度の奴隷にしないだけでなく、神が作られた秩序を優先することにもなるのです。

しかし、啓示によると、人間はただ神の似姿であるだけでなく、神の子でもあることがわかります。神は、キリストにおいてお与えになった無限の愛の贈り物を通して、神の本性にあずかることができる場所まで人間を高めてくださったのです。キリストこそ、「すべての人を照らすまことの光」(ヨハネ1:9)です。生きるこの意味を示し、神の子にふさわしい考え方や生き方ができるようにしてくださいました。神については教えるだけでなく、人間自身に、人間とは何かをお示しになったのも、イエズスご自身なのです。(『現代世界憲章』22)(…)

物質・経済面よりも、精神面の方がより一層大切であることをまず認めなければなりません。

せん。というのも、精神的価値の方がすぐれて直接的な仕方、最も高潔で最も価値ある諸相を醸成させてくれるからです。物質に深い価値を与えるのは精神にほかなりません。一九七九年十月二日、第三十四回国連総会で私が述べたように、この精神の優位を認めればこそ物質・技術・文明の発展もまた人間形成に役立つ、と確信できるのです。それはつまり、人間が真理と道徳的進歩を遂げることができるようになること、そしてまた、過去の文化遺産を受け継ぐと同時に、みずからの創造性を発揮して文化的な遺産をさらに増してゆくことができる、ということだ。(No.14)

今日、消費社会の幻滅させるほどの影響力をみるならば、福音の教えに基づいたカトリック学校としては、受けるより与える方により一層大きな喜びがあること、また、人間の値うち、何を所有しているかということより、むしろ自分が何者であるか、にすることを若者たちに教えないければなりません。そうすれば、質素で簡単な生き方のうちに人を自由にする力のあることがわかるでしょう。

今日、若者のなかには、現代科学の業績に魅せられて信じ切り、それ以上にねうちのあるものなどないかのように考えている人がいます。だからこそ、人類の進歩は科学技術の進歩では計り得ないこと、また、進歩と言えるためには、精神的価値や道徳生活の向上を真っ先に優先して考えるべきであることが、カトリック学校の教えるべき大切なこととがらなるのです。

物質優先の社会は根本的に不公平な状態にありますから、裕福に暮らしている人々がいる反面、飢えのため死に瀕している人々がい

愛するみなさん

ます。このような状態をなくそうと思えば、新しい秩序が必要となります。新秩序の根底となるべき正義と愛に基づいた教育が要求されるのです。

聖なるものへの自覚や道徳心を失い世俗化された社会では、宗教的価値を重んずる教育が何にもまして必要です。教育を受けるものが、信仰への呼びかけを感じとれるような教育が必要なのです。内的生活のねうちに目覚めさせることはカトリック学校の仕事です。そうしてこそ、若者たちが寛大な心で熱心に信仰のよびかけに応えることができるようになるのです。

最後に一言。キリスト教は決して人間(自然のレベル)の諸価値を否定したり無視したりするものではありません。誠実、言行一致、個人の自由や自己主張といった価値を高く評価しています。こういった価値をな

るのではなく、むしろ完成させるのです。つまり、それらが神から与えられたことをはっきりさせると同時に、罪によって墮落した人間の心を考えて、まずそれらの価値を浄める必要があることを主張しているわけです。

このようにして、単なる人間のイデオロギイによっては得られないもの、つまり、人生のほんとうの意味とゆたかな内的生活を、キリストのメッセージによって、すべての人が受けるようになるのです。(一九八二・一一・二十三)

教会はスポーツを奨励

教会はスポーツを支持しますが、とりわけスポーツは体育、つまり身体のための教育であると考えています。教会は、人間の身体を、

物質界の最高傑作であると考えるからです。聖書はこの辺の事情を比喩的に描写しています。それによると、創造主である神は、この身体に「生命の息」を吹きこまれました。その結果、身体は不滅の靈魂の道具となったわけですが、靈魂には、知恵と意志、それに自己を与える能力があります。ところで、このような能力は、物質である身体をはるかに越えるものなのです。(創世の書2・7参照)

それだけでなく、キリストの贖いのみ業により、身体は「キリストの肢体」となるとともに、「聖靈の神殿」ともなりました。そして、いつの日か決定的にのみがえり、永遠に生きることができるようです。

スポーツを健全に行なうということは、このような身体の高揚にピッタリ合うことです。健全なスポーツであれば、体力や美しさを、変に理想化(偶像化)してしまいうようなことにもならないでしょう。

スポーツから得る徳

さらに、スポーツが社会教育や道徳の面で、個人、または国家、国際的レベルにおいて役に立つ大切な要素であると、教会は考えています。人がいかに行動するかがよく現れるのがスポーツですから、確実に多くの徳を得るためのよい機会なのではないでしょうか。たとえば、忠実や誠実、フェアプレイ精神、勇気や忍耐、ねばり強さ、また団結、公平、相手を尊重することなど、数多く学ぶことができます。

しかし、スポーツ競技は、暴力にまきこまれたり、不正や作欺行為の機会になったりすることがあります。利益を得るためにだけ熱心に競技を勧めたり、経済や政治面からの圧迫や偏見が大手を振って歩くようになったりすれば、スポーツも、権力と金銭の単なる道具にすぎなくなってしまうでしょう。

(一九八二・五・三)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上の一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393